

審査の結果の要旨

氏名 白井 由紀

本研究は、白血病／悪性リンパ腫患者の終末期の症状・治療内容を明らかにするとともに、終末期医療を遺族の視点から評価し、同時に、遺族の現在の抑うつ状態を測定したものであり、下記の結果を得ている。

1. 死亡 1 日前でも 4 人に 1 人が「積極的治療」を指向されていたこと、2 割の患者で死亡時の病態が「寛解」「未判定」と、突発的で予測困難な死であったと推測されることから、白血病／悪性リンパ腫患者の終末期の特徴として、「積極的治療」から「緩和的治療」への移行の困難さが示唆された。さらに、治療方針の変更後も、輸液や輸血、抗生剤・抗菌剤など治療内容の大幅な変更はみられなかったことから、医療者は、病期や治療の指向性にとらわれず、早期から、患者と家族の QOL 向上を目指したケアの提供を心がける必要があると考えられた。また、死亡前 1 週間に、発熱 74.2%、出血 63.7%、疼痛 57.7%、呼吸困難 41.8%と、苦痛症状の出現率は高く、その一方で、院内緩和ケアチームの利用やペインクリニックの利用は少なく、症状緩和のための専門職へのアクセスが十分ではない現状が示唆された。
2. 死亡前 1 週間に受けたケアに関する評価は、緩和ケア病棟での全国調査に比べ、全体的に低かった。特に身体的ケア、精神的ケア、情報提供や意思決定への支援、介護負担軽減のためのケア、費用や医療者間の連携・継続について改善が求められていた。また、遺族(主介護者)の 4 割が患者の予後を理解していなかったと回答し、情報提供やコミュニケーションに関して、患者・家族と医療者との間に認識の乖離があることが示唆された。
3. 死亡前 1 週間に受けたケアの評価に、遺族(主介護者)の当時の健康状態や経済状況が関連していた。また、家族の介護力の関連も示唆された。患者のみならず家族の健康状態や経済状況、介護負担への配慮も重要であることが考えられた。さらに、意思決定や予後についての主介護者の認識も関連していた。コミュニケーションに関する医療者の意識・技術の向上を目指した取り組みが重要と考えられた。
4. 死別後半年から 2 年半が経過しても、抑うつ状態が重いとされるカットオフ値を超える遺族(主介護者)が 54.1%と多かった。患者の生前からの予期悲嘆のケアや、死別後の遺族ケアの必要性は高いと考えられた。

[別紙 2]

5. 当時の健康状態が不良だった主介護者、介護負担軽減のケア評価が低い主介護者で抑うつ状態が強かったことから、患者の生前から主介護者の健康状態や介護負担に留意したケアが、死別後の抑うつ状態への予防的ケアにつながる可能性が考えられた。

以上、本研究は、白血病／悪性リンパ腫患者の終末期の症状・治療内容の詳細な記述と終末期医療の遺族評価、および遺族の抑うつ状態を測定することで、白血病／悪性リンパ腫患者の終末期像と遺族の精神健康状態を明らかにし、終末期医療におけるケアの改善点や留意点、さらに遺族ケアの必要性を示した。本研究は、これまで皆無に等しかった本邦における白血病／悪性リンパ腫患者を対象とした緩和ケア研究の礎となりうるもので、学位の授与に値すると考えられる。